

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

『蘇れ日本人の会』 皇紀二六六三年四月二日収録ビデオより

『 真の武にて世界を治めよ 』

— 日本人は徳と胆力で対応する民族 —

一九九〇年の湾岸戦争以来、アメリカとイラクの国家間は緊張状態にありました。そして、今年の三月二十日から、ついにアメリカ・イギリス連合軍の攻撃が開始され、戦争が起きてしまいました。そして、このイラク戦争によって、一般市民を含めた多くの方が命を奪われるという事態が発生してしまいました。

為政者や軍人以外の一般市民の命を奪うような実力行使が、本来に平和な社会を築くために必要なのか。こうした世界の混乱を収めるための日本の役割とは何なのか。今回は真実の武の姿と日本の役割についてのお話です。

幕府化に 走るアメリカ

本日は、日本人に脈々と伝わっている「武の精神」についてお話を致します。現在、イラクにおいて、アメリカとイギリスの連合軍と言って良いのか、二国の攻撃と言った方が良いのか、いずれにしてもイラク侵攻がなされております。

本来であれば国連においての決議に基づいて行うべきであったと思えますけれども、いわゆる時間切れと言いますか、国連での決議は待てないという事で見切り発車をした感がございます。

しかし、ひるがえってこの戦さを見てみますと、そもそも太平洋戦争の後に、アメリカ・イギリス・フランス・中国・ロシア、当時はソ連でございましたけれども、この五大国が核兵器を持つ事は認めるけれども、その他の国が核兵器を持つ事は認めないという前提で来ているのです。大きく見た場合には、そもそもこの事自体が妥当なのかどうかという問題があります。

【核拡散防止条約】

核兵器保有国の増加を防止し、保有国が非保有国に核爆発装置や核分裂物質を提供しないことを目的とする条約で、アメリカ・ソ連（現ロシア）・イギリス・フランス・中国の五カ国のみが核兵器を保有することを認め、他の国には開発や保有を認めない。イスラエル・キューバ・パキスタン・インドは加盟していない。一九六八年に調印、一九七〇年発効。日本は一九七〇年調印、一九七六年批准。

略称＝NPT (Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons)

私の方でこの点をよくよく分析してみますと、丁度徳川時代に各藩がそれぞれの独立した藩として認められながらも幕府の下に統率をされていた。

国際情勢に 五大老を見る

しかも、その元になるものはどこから来たかと言いますと、豊臣秀吉の時代、特に秀吉の晩年において、年老いた後の子供としての秀頼誕生の後、その将来を危ぶんで五大老というものを置き、その五大老に後を託しますよと言った事によく似てはいないかなと思います。

【五大老】

豊臣秀吉がいた当時の豊臣政権における最高機関。

徳川家康・前田利家・毛利輝元・小早川隆景（死後は

上杉景勝）・宇喜多秀家が任じられた。

数字も五つの国だけが核兵器を持つ事が許され、その他の国は持つ事さえ許さない。「核拡散防止条約」で強制しております。

その五大老の中で加賀の前田とか、徳川家康とか、錚々たる秀吉の側近の方々に頼んだわけですけども、秀吉亡き後に、家康が一人、そこから抜け出て徳川幕府を聞いた。同じ五大国と言いながら、現在アメリカが正に家康の如く世界の中に幕府として君臨し、ロシア・中国、そういったものが、あるいは加賀の前田藩に相当し、仙台の伊達藩に相当する。その他の国々も薩摩の島津藩に該当するというような、各藩に割り当てられた感があります。

テロを作った のは誰か

いつの間にかアメリカが幕府になつてきているような感が致します。そうした中でイラク戦争で

はないかと思えます。きっかけは一昨年の九月十一日のテロ事件でございました。名目上は「テロを撲滅する」という形をとっております。テロは良くありません。テロはよくないけれども、テロを撲滅するという名目で、次々とアフガニスタンをはじめ、イラクに、さらに次には北朝鮮にと手を伸ばしていくのではないかという徴候が認められます。

しかし、そもそも何故テロが起こったのか、よくその所を考えて頂きたい。それはイスラエルの建国に大きく関わりがあります。旧約聖書の中には、数千年の後にユダヤ人はイスラエルという国を作って、再びこの地、聖地エルサレムに戻ってくるのだという事が伝えられております。

その為に、第一次世界大戦の時にイギリスがそれを利用して、ユダヤ人の豊かな富を利用して、「第一次世界大戦において大金を出してくれば戦争終了後にイスラエルの建国をしよう」という約束をして金を出させた経緯がございました。しかし、残念ながらイギリスはその約束を果たせなかった。

第二次世界大戦の時に、アメリカが同じ手を使ってユダヤ人に大金を出させ、今度は間違いなくユダヤ人に対してイスラエルの建国をする約束をした。これが現在のパレスチナ難民という形になって顕れているわけです。いきなりエルサレムをはじめとするその周辺に居たパレスチナ人をそこから追放して、パレスチナ難民というものが起こったわけです。

イスラエルの建国と中東紛争の流れ

② ユダヤ人とエルサレム

一世紀、ローマ帝国によりユダヤ人はパレスチナ地方から追われ離散したが、ユダヤ人はパレスチナ地方を「旧約聖書」の神の与える「約束の土地」として信じた。

エルサレムにはユダヤ国家の神殿の一部が「嘆きの壁」として残っており、またキリストが十字架にかけられたゴルゴダの丘と、さらにイスラム教の「岩のドーム」があり、それぞれの聖地となっている。

③ ユダヤ人の国家建設運動

19世紀末からユダヤ民族による「自分達の国をつくろう」というシオニズム運動が起こる。

④ 第一次大戦でのイギリスの三枚舌外交

第一次大戦時、イギリスはユダヤ人に対して「戦後パレスチナ地方にユダヤ人国家を建設することを支持する」と約束して資金提供を受けた。

その一方でアラブ人にはアラブ人の王国建設を支持する約束をし、さらにフランスとはこの地方を分割統治するという矛盾した外交を行った。

⑤ イギリスの占領統治の限界

第一次大戦後にパレスチナ地方をイギリスが植民地化したため、約束を信じた多くのユダヤ人が移民してきた。それをきっかけにアラブ人とユダヤ人は対立関係になる。第二次大戦後、パレスチナ人(パレスチナ地方のアラブ人)とユダヤ人の衝突とイギリスを標的としたテロに手を焼いたイギリスは問題を国連に委ねた。

⑥ イスラエル建国と中東戦争

国連はパレスチナ地方をユダヤ人とアラブ人が分割する案を決議したが、人口が全体の1/3のユダヤ人に57%の地域を割り当てる不平等な内容だったのでアラブ人は拒否した。

しかし、1947年5月14日イギリス軍が撤退するとアメリカ等の欧米諸国の支援を受けたユダヤ人は、合意のないままイスラエル建国を宣言。パレスチナ人を追い出したため、パレスチナ難民が発生した。これにアラブ諸国が反対して中東戦争が始まったが、アメリカのイスラエル寄りの介入等によりイスラエルが勢力を拡大した。

したがって、アラブ人は皆、快く思っていない。同じアラブ民族であるパレスチナ人をエルサレムから追い出した。他国の事でございませぬので、日本人にはピンとこないかもしれませぬが、例えば「東京を中心とする関東地方に住む者はここから出て行きなさい。関東のいわゆる一都六県の所からは出て行きなさい。ここは別の新しい国を作ります」と言われた時に、そこに住んでいた人々が皆、難民として追いやられたのだという事をよく考えて頂きたい。

パレスチナ難民とはそういった形で起こったわけですから、パレスチナの人をはじめ、アラブの人達が怒って、そういったアメリカの仕打ちというものに、何とか報復しようという気持ちになるのはやむを得ないのではないかと思います。

そうした原因を作った元を考えないで、起こった事件の一つ一つを捉えて云々してみても、その種を撒いたのは誰かという事をよく考えて頂きたい。その立場に追いやられた人の身になって考えてみれば、よく理解できるのではないかと。いつ迄も勝てば官軍